広　島　大　学

実　施　報　告

(1) 実施責任者報告

広島大学学生部長　川　﨑　　尚

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

○　大学は社会一般に対して閉鎖的・独善的になりやすい傾向がある。放送を通じ大学レベルの教育を広汎な地域の視聴者に公開することは、開かれた大学としての使命と考える。

本学では昭和５１年から放送による公開講座を行っている。その企画立案を行うため、学長を委員長とし、各学部から選出された委員で組織する広島大学放送教育実施委員会に若干名の実施委員からなる専門委員会を設け、実施の細目等の検討を行うこととしている。

○　講座終了後、大学の実施委員会、講座担当者と放送局の制作担当者を含めた会議を開催し、本年度の反省及び次年度の計画について意見の交換を行う。

○　県内の教育委員会、市町村の広報担当課に受講案内及びポスターの配布・掲示等を依頼して、受講生募集の協力を得ている。

2. テーマの選定とそのねらいについて

○　日本の建築空間（テレビ講座）

建築空間は全ての人が身近かに接していながら、その内容についてはあまり深く考えたことがないものである。

そこで、この講座では日本の建築空間を、造る方（専門）の考え方を、使う方（一般）の立場の人がよくわかるように、また、使う立場の人も自分たちの身の回りの建築空間をより善くしていくことができるように説明した。

説明に際しては、古代、中世、近世、といった歴史的変遷、社寺住宅といった建築種別にも留意し、日本の建築文化の変遷も、あわせて理解できるようにした。

○　性を考える（ラジオ講座）

いま、われわれの社会の性に関する意識は、大変に多様である。伝統的禁欲主義から快楽追求主義まで実にさまざまな感じ方、考え方が一つの時代にひしめいている。当然にこの考え方の違いにより、生じているのが現代の性の問題点と言えるだろう。

したがって、何んらかの単一の立場から性について論じても意味が少ないと言えるだろう。本講座も、特定の考え方のうえに立つことを避け、科学的な知識とできるだけ客観的な観点からの議論を目指した。

しかしながら、性という問題は各人の生き方につながっている問題であり、最終的には各個人が結論を出すべき問題である。その意味で、本講座のねらいは受講者が性について自分で考えてみるきっかけを提供することであった。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

テレビ講座の場合、番組は受講者に建築空間になじんでもらうために、広島の近くにあって見やすい建築や、全国的に有名な建築について、２、３の事例を講師が現地で説明する形で収録し、スタジオでは録画に図や写真を補って全体の流れを説明する形にした。

放送内容は４５分という時間を考慮して、山が二つになるようにし、間の転換には、アナウンサーのナレーションを音楽とともに流し、受講者の緊張が持続するように努めた。

印刷教材は番組の内容を、もう一度思い出すことができるよう、講義の概要をのせ、中心テーマになった図をできるだけ多数収録した。学習指導は講義で欠けたと思われる点、特に建築用語の解説を別に作った図面を使用して説明した。

ラジオ講座の場合をとると、テキストと番組の関連については、特に徹底した考えで統一したわけではないが、できるだけテキストにとらわれず自由に番組を作り、番組自体のおもしろさを先行させることとした。また、全１３回を主任講師が司会とインタビューをやり、プログラム全体の流れと統一性をもたせるようにした。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

○ 日本の建築空間（テレビ講座）

終了後の調査、またスクーリング時の質問の内容から、受講者が建築空間に興味をもち、また、基礎的な知識が飛躍的に進歩したことは確実である。

○ 性を考える（ラジオ講座）

細密な学習効果については現段階では、データの集計がまだのため論じることができないが、印象としては人数、雰囲気からみてかなりの関心の高さがうかがえた。

高年齢者の受講者から、性教育、女性学等の話題である種のとまどいや、反発のような態度がスクーリング中にほんの少しみられたが、こういったことは本講座のねらいからすれば、重要な学習過程と考えられるべきである。

できるだけ客観的に講師の考え方を受講者に伝えるため、敢えてインタビューがまとめのようなことをしなかった。

このため、まとめをはっきりすることを求める声も少しみられたようである。

5. 印刷教材の作成過程について

① テキスト作成要領に従って、各講師がそれぞれ原稿を作成

② テキスト作成会議を開催し、編集を行う。

③ 原稿をまとめて学生部教務課へ提出

④ 印刷原稿の校正に関しては、各講師すなわち執筆者の責任において三校まで行う。

テレビ講座のテキストは、イラストレーションをふんだんに取り入れることにより、建築についての理解を深めるとともに、やわらかい印象を与えることができた。

6. 学習指導の実施状況について

本年度、スクーリングの回数を増やし、広島市、福山市でそれぞれ３回にわたってスクーリングを行った。

１１月２９日の福山市でのスクーリング（ラジオ科目）では、出席者が少人数ということもあり、担当講師を含め暖房機を囲みなごやかな雰囲気で質疑、討論などが行われた。

昭和６２年度放送利用による広島大学公開講座の学習指導状況

1. 出 席 状 況

科目＼月日		9月27日(日)	11月29日(日)		12月13日(日)	1月10日(日)	1月31日(日)
		スクーリング（開講式）	ＶＴＲ	スクーリング	ＶＴＲ	ＶＴＲ	スクーリング（閉講式）
日本の建築空間（テレビ科目）	広 島 (146)	101 (69.2%)	6	61 (41.8%)	5	6	56 (38.4%)
募集人員 150名 受講者数 174名	福 山 (28)	19 (67.9%)		9 (32.1%)			6 (21.4%)
性を考える（ラジオ科目）	広 島 (145)	97 (66.9%)		49 (33.8%)			50 (34.5%)
募集人員 150名 受講者数 177名	福 山 (32)	18 (56.3%)		9 (28.1%)			8 (25.0%)
合 計	(351)	235 (67.0%)	6	128 (36.5%)	5	6	120 (34.2%)

2. 修 了 状 況

地区＼科目	日本の建築空間		性を考える	
	受講者数	修了者数	受講者数	修了者数
広島地区	146	115 (78.8%)	145	112 (77.2%)
福山地区	28	21 (75.0%)	32	21 (65.6%)
合 計	174	136 (78.2%)	177	133 (75.1%)

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

放送公開講座は、大学における学問・研究の成果を地域社会へ開放し、社会人に対する生涯教育を推進するため、放送というメディアを使って情報提供するものである。

誰でも自由に視聴でき、特定の地域にかたよらず広汎な地域に提供できる。又、担当講師とのスクーリングをはじめ、講義終了後も受講生との人間的な結びつきによって、教育効果が高まっていると確信する。

放送公開講座のテープの二次利用については、受講者等の希望により、今後、より一層地域社会へ開放することを目指し検討を重ねて行く必要があると思う。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

テレビ講座

大学の授業への活用については、本講義を専門家以外の受講者を対象に作成したので、始めから考えていない。

しかし、一般教育の講義としてならば活用の余地があるかもしれない。

ラジオ講座

一般教養、教員養成等の場面でたいへん利用度の高いプログラムと考えられるが、体系だった利用は、性、性教育、女性学についての大学のなかでの授業、講座の充実を待たねばならないであろう。

しかしながら、担当者が各自関連の授業場面で使用することにより、有効利用していくことを考えて行きたい。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

テレビ講座

放映を終わって、講師のテレビジョンについての知識の少なさが、より良い番組をつくる妨げになっているのではないかということを感じた。

また、番組製作者もこの問題はどうにもならないと、あきらめているのではないかと思われる。

この点の克服が今後の課題であろう。

ラジオ講座

スクーリング、放送、番組制作の時間がまちまちのため、担当者と受講者や聴取者との間のコミュニケーションがたいへん難しい。もう少し聴取者の声を番組や学習指導に反映できればと考える。

⑵ 科目担当主任講師の所見

（テレビ科目） 日本の建築空間

主任講師： 工学部教授 鈴 木 充

建築というものは、実社会にあって日々人々が接しているものである。それに対して、建築教育は工学としての専門家の養成部門に限られ、使用者である一般社会人を対象にした書物以外の教育の機会はめったにない。その意味で「日本の建築空間」をテレビジョンで放映できる今回の公開講座には大いに意欲をそそられた。講義の内容は専門の学生でもなかなか難解なものである。それが、テレビジョンという４次元的な媒体を使うことによって、一般受講者に興味をもたせ、ある程度建築空間についての理解を深めることができたのであるから、この試みは成功したといってよい。しかし、反省点もまた多い。

今回の講義を始めるのに当たって、私は形式上の問題をふたつ設定した。一つは４５分という放送時間の長短、もう一つは中休み、すなわちインターミッションの問題である。結論からいえば、４５分の放送時間は決して長くない。３０分では一度の講義としては明らかに短すぎる。これは、講演で１時間以内というのが短すぎるのと同根であろう。一つの講義の中に話しの山を二つ持って来ようとすれば、３０分では納まらなくなる。それでは、４５分の間、いかにして受講者の緊張を持続させるか、これが当然問題となるが、今回の講座では前もって場面転換用に講義の内容に関係はあるが、話題には直接関係のない３分間程度のビデオを準備し、あらかじめアナウンサーのナレーションと音楽をいれておいた。これを番組の中ほどに流し、それから話題を転換するわけである。

この試みは自分ではうまくいったと思っている。前半に多少まごついても、この時間にアナウンサーと打ち合わせることができるし、スタジオのスタッフも一息つくことができる。受像機の前の受講者も同じ気持ちであろう。そして、また後半の緊張が続く。

放送を終わって感じたことは、いかに私がテレビジョンというものを知らなかったか、ということであった。放送を通じて授業を行うのであるから、当然のことながら講師はその媒体の性格や特徴をよく知っていなければならない。私もある程度は知っているつもりでいたが、大学の教師としては、どうしても教室の講義の延長と考えてしまう。

テレビがリズムである、と気付いたのは１０回の予定の録画の７回目ぐらいであったろうか。スタジオのカメラや調整室のビデオが一定のリズムにのっているときは、講師も話しやすい。しかし、一端このリズムが壊れてしまうと、たとえ録画しなおそうとしてもなかなかうまくいかない。録画に際してはスタッフ全員が一定のリズムを保つ緊張感を維持することが大切だということが、４５分の録画を数回行なってやっとわかった。これは、教室での授業の進め方とはまったく違う。

放送による公開講座がより良い内容のものになるためには、講義の内容を一番よく知っている講師が放送媒体の特徴をいかして計画を立てる必要がある。しかし、放送による講義を経験する機会は極めて少なく、また、放送媒体の特質を解説した本などはまず見あたらない。この点をどう克服するか、

非常に難しい問題だと思う。

（ラジオ科目） 性を考える

主任講師： 学校教育学部助教授 若 尾 裕

性に関する講座の必要性と意義は、おそらく今までにも考えられてきたに違いない。しかし、実現することが無かったのは、おそらく適切な講師を見い出すことが難しいことと、さまざまな立場があってそれを一つのまとまった形でプログラム化するのが難しいこと等の理由で成されなかったのではないかと考えられる。

本講座の場合もこういった困難さは同じであり、やはりまず第一に講師の選定に苦労した。広島大学内に性に関する講座を開いている研究者がいないことに因るであろう。しかし、これは全国の国立大学どこでも似通ったような状況である。そこで、専門家ではなくとも、性に関するなんらかの分野に関わっている教官に、それぞれの分野で関わってもらうこととし、講座内容も平易に性に関してさまざまな角度から切り込んでもらうというスタイルをとった。さらに、必要と思われる領域については３名の学外講師を招き、全体のバランスをとるように図った。

第二の困難さである立場や主張の差であるが、これについては各講師の立場主張をありのまま提示し、受講者とともに考えるというやり方をとった。しかし、毎回異なる講師が異なる主張をしたのでは、一貫性を欠き受講者を混乱させてしまいかねない。これを避けるために主任講師が最初に全体の意図を説明し、その後の各プログラムの司会と聞き手を務めるという方法をとった。結果としては、思ったほどの大きな立場の違いによる問題は生じなかったが、これは各講師の理解と協力に依るところが大きいだろう。

全プログラムの録音を終了した現在では、主任講師の認識の不足による切り込みの甘さや、企画構成のいたらなさをおおいに痛感している。そして、社会教育としてのこの領域の重要性と充実の必要性をますます認識することとなった。今後も、本講座を轍としてますます充実した性に関する講座が、各公開講座で行われることを希望したい。

広 島 大 学

制 作 報 告

(1) 制作責任者報告（テレビ）

中国放送テレビ局制作部　　渡 辺 茂 美

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

"日本の伝統的建築の内外空間処理の技法を解析し、よりよい建築空間を作り出していくための考え方を提案する"というのが今回の大テーマであった。

ともすれば、創る側、研究する側の情報を一方通行で伝えるおそれがあるとの認識のもとに、大学側、特に担当講師と取材、構成以前に打ち合わせを行なった。

その結果、空間の美化は、創る側と使い維持する側の両者が共通の視点に立つための講座にしようと、大テーマから、より具体的なねらいが生まれた。

取材先の洗い出し、平面図・立体図・断面図と、現存の建物との組み合わせなど、打ち合わせは具体的で取材の段階では、講師とスタッフが楽しい旅をすることが出来た。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

1） 番組の最初に前回のおさらいと、その回のねらいをアナウンサーと対話で導入。

2） 中間で、その回の主役となる現存の建築や絵図を映像素材にして、音楽とナレーションで、約２分のインターミッションをおいた。

3） エンディングは、出来るだけ１分間を確保するように努め、講師が現存の建築の場所を歩くシーンを使った。

4） 専門用語は［　　］付きで画面のサイドにスーパーインポーズで出す。

5） 現存の建築の場に、担当講師が必ずたって、その場で解説を加える、という手法をとり入れた。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

視聴者からＶＴＲのプリント依頼が多かった。

〃建築を人間の歴史と関連づけてみるとそこにひとつのドラマがありますね〃

というモニター報告があり、講師の話術と、構成が人間を対象としたものであった証あり。視聴率は年々高くなってきた。

「広島大学公開講座」平均個人視聴率・視聴者構成割合

	男女、年齢区別視聴率（%）										視聴者構成割合（%）								13週平均視聴率（世帯）
			男				女						男			女			
	4才～12才	13才～19才	20才以上	20才～34才	35才～49才	50才以上	20才以上	20才～34才	35才～49才	50才以上	4才～12才	13才～19才	20才～34才	35才～49才	50才以上	20才～34才	35才～49才	50才以上	
'87	0.4	0.9	0.5	1.1	0.5	0	0.3	0	0.5	0.5	11	23	25	13	0	0	13	14	2.4
'86	0	1.2	1.3	0.7	2.4	0.6	1.4	0.5	1.4	2.3	0	12	7	27	6	5	16	27	2.1
'85	0.2	0.8	0.4	0.4	0.5	0.5	0.6	0.7	0.9	0.3	6	19	8	13	10	15	23	6	1.8

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

（取材について）

今回、現存の建築およそ３０ケ所の取材をしたが、その中では、大学公開講座そのものの歴史から説明して、相手（例えば、奈良・唐招提寺）に取材の了解を求めなければならないケースもあった。

そこで放送教育開発センターで外部向けの〝大学公開講座ご案内版〟を作成する必要あり。

（制作について）

今回、電波メディアを理解していただいている講師に恵まれたが、講師自身が、構成にはいる前に、放送局に集まって電波メディアの特性、それは、テレビにおけるスライド、ＶＴＲ、フリップ、テロップの使い方といった基本的な、講師の学習会を開く必要がある。

(2) 番組制作担当者の所見

（テレビ科目） 日本の建築空間

制作担当者： 中国放送テレビ局制作部ディレクター　　渡 辺 茂 美

〝講師とディレクターが一緒に制作する〟それが大学公開講座だよという古くて新しい認識を想い起こす体験をしました。

幸い鈴木充教授、杉本俊多助教授両講師ともテレビメディアの特性をよく理解していただいていたので、〝一緒に制作〟できた。

私は、かねて、この番組は、講師の人柄を視聴者にご紹介申しあげることであるという、秘かな想いを持っている。したがって、打ち合わせとは、ディレクターが講師の人柄をつかむことだと心がけている。そこから、講師が自らの学問を楽しんでいる人なのかどうかという視点が生まれてくる。

放送によって、地域社会と大学を結ぼう、地域社会に開かれた大学をめざそうという講座の大きなねらいは、ディレクターには直接関係ないといえば誤解を受けるかも知れないがとにかく、講師の魅力をモンタージュすることに努めた。

手法は、仮に講師が説明を間違えた場合もＶＴＲをストップすることなく講師らしい訂正をそのまま放送するという、講師に対しては失礼な手法をとったこともある。

ご協力いただいた講師に対して、熱烈多謝であるが取材にもっと時間をかけることが出来なかったことを反省している。

(1) 制作責任者報告（ラジオ）

中国放送ラジオ局制作部　　田　島　明　朗

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

学校教育学部の担当であるが、学部に所属する講師３名、広島大学内他学部の講師２名、学外講師３名の布陣で“性を考える”というテーマに取り組んだ。主任講師の専攻は、作曲・音楽理論であり、他の諸講師は、病理学、心理学、産婦人科学、心身医学等の専門家である。

番組制作に当たっては、基本的に、各講師の専門的立場から考察した“性”を、主任講師との対談形式で、自由に論じてもらう講座に徹したが、“性”を語る時、各専門知識、研究に基づく講義の内容は、インタビューを担当する主任講師の守備範囲をしばしばはみ出し、軌道修正を試みながらの収録であった。

大学当局・各講師との協力関係は、終始良好に推移しつつも、いわゆる『講師団』『講師陣』的な結合を見出すに至らず、１３回の講座の間口が広がり過ぎた反省点を残す。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

○第１回を除き、全部の講座のインタビューを、主任講師が担当し、テーマの一貫性保持に資した。

○主任講師が担当する第１回の講座は、高等学校２年に在学中に妊娠し、結婚・出産を経験した19歳の夫婦のインタビューを録音挿入し、“性を考える”シリーズの引鉄とした。

○第８回『学校における性教育』では、小学校・高等学校で性教育を担当する教師の声を取材し、また、広島県教育委員会の性教育担当者のスタジオ参加を求めた。

○番組前後に使用するテーマ音楽は、主任講師が作曲し、全部の回に使用した。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

放送期間中に行った『聴取率調査』の結果及び『ラジオエリア』を表に示す。

調査期日・昭和６２年１２月６日・第８回『性行動の障害と問題』を放送。

１５分毎の個人聴取率・サンプル数＝６００

区分 / 時間帯	個人全体	性・年齢区分										職業区分				
		男全体	女全体	男女12才～17才	男女18才～24才	男			女			男		女		男女学生
						25才～34才	35才～44才	45才～59才	25才～34才	35才～44才	45才～59才	給料生活者	自由商工自営業	有職者	家庭婦人	
20:00～20:15	1.1	1.1	1.1	1.4	*	1.6	1.3	*	1.7	1.4	1.3	0.5	2.6	1.1	1.3	1.1
20:15～20:30	1.1	1.1	1.1	1.4	*	1.6	1.3	*	1.7	1.4	1.3	0.5	2.6	1.1	1.3	1.1
20 30～20:45	1.3	1.4	1.1	2.9	*	1.6	1.3	*	1.7	1.4	1.3	0.5	2.6	1.1	1.3	2.1

県名	カバー率	人口	世帯数	ラジオ保有台数	
				100世帯あたり保有台数	推定保有台数
広島	100	2,819,000	956,000	294.3	2,813,000
山口	91	1,454,000	488,000	227.9	1,112,000
岡山	79	1,520,000	477,000	268.5	1,280,000
島根	93	742,600	222,000	250.9	557,000
鳥取	3	18,000	5,000	254.2	12,000
愛媛	100	1,547,000	513,000	256.1	1,313,000
香川	100	1,027,000	324,000	257.8	835,000
徳島	59	498,000	152,000	264.4	401,000
高知	71	604,000	212,000	200.6	425,000
大分	100	1,260,000	398,000	226.1	899,000
福岡	34	1,601,000	530,000	221.0	1,171,000
熊本	3	5,000	16,000	198.1	31,000
宮崎	7	8,000	27,000	212.5	57,000
計		13,103,600	4,320,000		10,906,000

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

放送利用の公開講座のテキストと聴取者の関係は、多くの報告書に見受ける。

3に示した聴取動向に見る通り、ラジオ公開講座の聴取人口は『万』単位に及ぶが、テキストの発行部数は『百』の単位に留まる。

受講生として大学に登録し得た者以外の殆どの聴取者はテキストを見ていない。

テキストを必要とする聴取層に、いかに無駄なく、負担を少なく配布するかに腐心しつつ、番組制作に当っては『テキストにある様に』とか『何ページの図を・・・』という表現を、出来るだけ講座の中から省きたい心理を抱く。

(2) 番組制作担当者の所見

（ラジオ科目） 性を考える

制作担当者： 中国放送ラジオ局制作部ディレクター　田 島 明 朗

“性”を真正面からとりあげ、これと取り組む公開講座は、本年度の広島大学を最初とする。
例え“性教育”に絞ったとしても、専門的な講座を持つ大学は、まだ日本では稀である。
広島大学自体も、この講座を持っていない。

反面“性”は、相応に興味を持たれる主題でもある。
電波媒体を利用する公開講座において、興味に流される事を防ぎつつ、大学＝講師側の意図する講座の目的を達する構成、表現には、終始細心の注意を求められた。

『性は隠すもの、秘めるもの』という考えを偏見とし、これを捨てさせる事が当講座の第一目標とされている以上、放送に現れる講師の表現も、一般には露骨と感じられる用語が多々使用される。
大部分は、医学的、解剖学的に必要なものとして露出したが、この点に関する苦情等は聞かれなかった。

複数講師によって組立てる一つのテーマの講座で、毎回苦心するのがシリーズとしての“一貫性”であるが、本年度の様に、学部外、大学外の講師を多数含めて一つの講座を組立てるときは、主任講師の講座全体に及ぼされるべき指導力と見通し・講師陣のティームワークが必要とされる。
この点、やや恨みを残す今年度の公開講座であった。

講座の概要

＜科目の概要＞

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
日本の建築空間 （テレビ）	日本の伝統的建築の内外の空間処理の技法を解析し、よりよい建築空間を作り出していくための考え方を提案する。	最近日本の建築学や都市計画学の分野では、建築を単なる物としてとらえるのではなくて、内部や外部の空間を秩序づける要素の一つとして把握することが多い。 本講座はそのような建築の新しい考え方、建築空間の概念を一般向けに解説すると同時に、日本の建築空間の歴史的変遷について解説し、受講者に建築空間の概念の浸透をはかる。	毎回広島地域でなじみ深い建築（例えば厳島神社や出雲大社）の探訪で作成したビデオを１５分程度流し、関連した事項を写真あるいは図面を使って説明する。
性を考える （ラジオ）	今日、わが国では性について、ある意味で混乱期にあると言えよう。 一昔前であれば、良くも悪くも性についての規範が明確であり、その意味での混乱はさほど生じなかったといえよう。 よく議論されるのは少年の性の逸脱であるが、これについての大人側の対応も多くは純潔を説くのみで、実際的な説得力には乏しい。大人側の性についても、同じ様なもので風俗産業やマスコミの取り上げ方を見ても、少なくとも若者を納得させるだけのものには見えにくい。 本講座ではこうした状況で、ある規範を打ち出すというのが目的ではなく、正面から性に関するわれわれの問題点を見すえることをまず目的とし、そこからあるべき姿を模索してみたい。	中心的なテーマで述べたように、まず性に関する偏見を捨て、一人一人が自分で考えるための土台を提供するのが、ねらいであるが、大きく次の二つに分けることができる。 1）性行動、妊娠、出産、避妊などについての正しい情報を知らせること。 2）家族、社会といった社会的なレベルにおいての性と性役割について、女性問題を含めて考えること。	本学教官５名に、学外から産婦人科医、心理療法家３名を加えた８名の講師により、それぞれ心理学、社会学、教育、医学、芸術の立場からテーマについて講じる。 内容、雰囲気に一貫性を持たせるために、講座責任者の若尾が開き手役として進行を受け持ち、受講者からの声も出来るだけ反映させていきたい。

広 島 大 学

〈各科目の構成〉

（テレビ科目） 日本の建築空間

主任講師：工学部　教授　鈴　木　　充

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第 1 回	10月 3日	建築空間とのおつき合い	工学部教授　鈴木　充
第 2 回	10月10日	古代人の建築感覚	〃
第 3 回	10月17日	中国建築と日本建築　パートⅠ	〃
第 4 回	10月24日	中国建築と日本建築　パートⅡ	〃
第 5 回	10月31日	住まうための建築空間	〃
第 6 回	11月 7日	都市とその周辺	〃
第 7 回	11月14日	城と城下町	〃
第 8 回	11月21日	道具と建築感覚	〃
第 9 回	11月28日	民家の建築空間	〃
第 10 回	12月 5日	西洋建築との出合い	工学部助教授　杉本　俊多
第 11 回	12月12日	ビルディングの登場	〃
第 12 回	12月19日	モダニズム建築	〃
第 13 回	12月26日	現代の建築空間	工学部教授　鈴木　充

（ラジオ科目） 性を考える

主任講師：学校教育学部　助教授　若　尾　　裕

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第 1 回	10月25日	なぜ今、性か？	学校教育学部助教授　若尾　裕
第 2 回	11月 1日	エイズをめぐって	総合科学部教授　難波　紘二
第 3 回	11月 8日	性倫理の歴史	〃

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第 4 回	11月15日	恋愛と性	学校教育学部助教授　石井　眞治
第 5 回	11月22日	性と結婚	〃
第 6 回	11月29日	妊娠と誕生	絹谷産婦人科院長　絹谷　一雄
第 7 回	12月 6日	性行動の障害と問題	エリザベト音楽大学助教授　松原　秀樹
第 8 回	12月13日	学校における性教育	学校教育学部教授　黒田　耕誠
第 9 回	12月20日	性 ── 女性学の立場から　その1	土屋病院医師　河野美代子
第 10 回	12月27日	性 ── 女性学の立場から　その2	〃
第 11 回	1月10日	映画メディアに描かれる性と暴力が人間行動に及ぼす効果について	総合科学部助教授　藤原　武弘
第 12 回	1月17日	現代社会と性	〃
第 13 回	1月24日	終わりに ── 豊かな人生のために ──	学校教育学部助教授　若尾　裕ほか

〈スクーリング〉

（テレビ科目）　日本の建築空間

① 広島地区（広島市）

開講式

日　時……昭和６２年９月２７日（日）　10：00～10：10

場　所……広島大学法学部・経済学部１３４号教室

スクーリング

実施回数	日時	担当講師	場所
3回	昭和６２年　９月２７日（日） 10：10～12：10	工学部教授 鈴木　充	法学部・経済学部 １３４号教室
	昭和６２年１１月２９日（日） 13：00～15：00		
	昭和６３年　１月３１日（日） 10：30～12：30	工学部助教授 杉本俊多	

閉講式　日　時……昭和６３年１月３１日（日）　12：30～12：40

場　所……広島大学法学部・経済学部１３４号教室

② 福山地区（福山市）

開講式

日　時……昭和６２年９月２７日（日）　１４：４０～１４：５０

場　所……広島大学教育学部福山分校　講義室３２１

スクーリング

実施回数	日　　時	担 当 講 師	場　　所
３回	昭和６２年９月２７日（日） １４：５０～１６：５０	工学部　教授 鈴 木　　充	教育学部福山分校 講義室３２１
	昭和６２年１１月２９日（日） １３：００～１５：００	工学部助教授 杉 本 俊 多	
	昭和６３年　１月３１日（日） １０：３０～１２：３０	工学部　教授 鈴 木　　充	

閉講式　日　時……昭和６３年１月３１日（日）　１２：３０～１２：４０

場　所……広島大学教育学部福山分校　講義室３２１

（ラジオ科目）　性を考える

① 広島地区（広島市）

開講式

日　時……昭和６２年９月２７日（日）　１３：００～１３：１０

場　所……広島大学法学部・経済学部１３４号教室

スクーリング

実施回数	日　　時	担 当 講 師	場　　所
３回	昭和６２年９月２７日（日） １３：１０～１５：１０	学校教育学部教授 黒 田 耕 誠 学校教育学部助教授 石 井 眞 治	法学部・経済学部 134号教室
	昭和６２年１１月２９日（日） １０：３０～ １２・３０	総合科学部教授 難 波 紘 二	法学部・経済学部 128号教室
	昭和６３年１月３１日（日） １３：００～１５：００	学校教育学部助教授 若 尾　　裕 エリザベト音楽大学助教授　松原 秀樹	

閉講式　日　時……昭和６３年１月３１日（日）　１５：００～１５：１０

場　所……広島大学法学部・経済学部１２８号教室

② 福山地区（福山市）

開講式

日　時……昭和６２年９月２７日（日）　１２：３０～１２：４０

場　所……広島大学教育学部福山分校　講義室３１４

スクーリング

実施回数	日　　時	担当講師	場　　所
3回	昭和６２年　９月２７日（日） １２：４０～１４：４０	学校教育学部助教授 若尾　裕	教育学部福山分校 講義室３１４
	昭和６２年１１月２９日（日） １０：３０～１２：３０	学校教育学部教授 黒田耕誠	
	昭和６３年　１月３１日（日） １３：００～１５：００	総合科学部助教授 藤原武弘 学校教育学部助教授 石井眞治	

閉講式　日　時……昭和６３年１月３１日（日）　１５：００～１５：１０

場　所……広島大学教育学部福山分校　講義室３１４

〈　再　視　聴　〉

（テレビ科目）　日本の建築空間

回	日　　時	内　　容	場　　所
1	昭和６２年　１月２９日（日） １０：３０～１２：４５	第１回～第３回放送分	法学部・経済学部 141号教室
2	昭和６２年１２月１３日（日） １０：３０～１４：１５	第４回～第８回放送分	
3	昭和６３年　１月１０日（日） １０：３０～１４：１５	第９回～第13回放送分	

（ラジオ科目）　性を考える

実施期間・日時	場　　所
昭和６２年１１月２日（月）～昭和６３年１月３０日（土） １０：００～１６：００ ただし、土曜日は９：３０～１１：３０ （日曜日、祝日及び年末、年始、（12/28～１／４）を除く）	○広島大学学生部教務課教務係 ○広島大学教育学部福山分校学務係